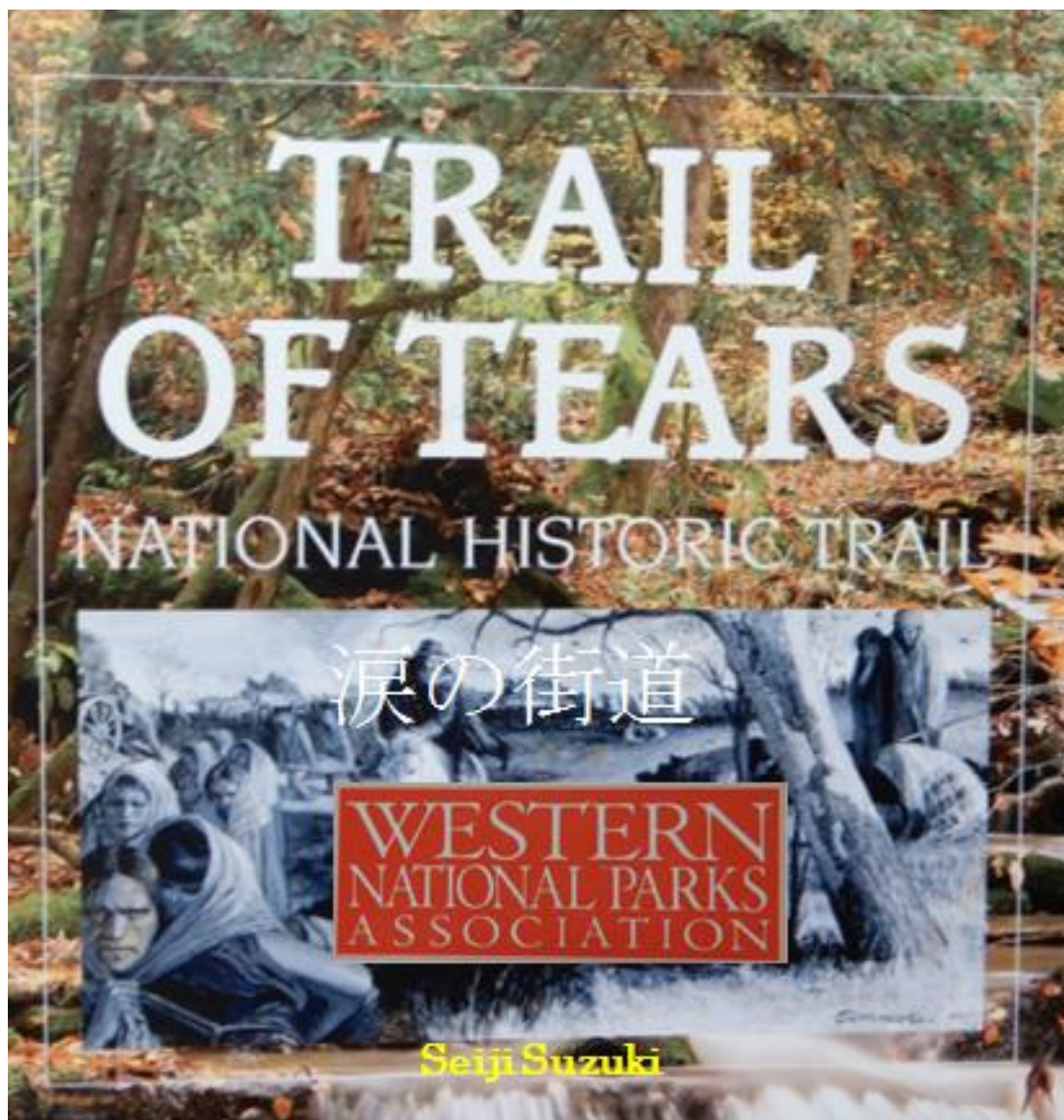




ここに紹介するものは、個人的に翻訳されたものでありの、専門家によるものでもありませんし、販売を目的とするものではありません。さらに詳しいものが必要な方は、下記にご連絡ください。

National Park Service
Long Distance Trails Group Office – Santa Fe
P.O. Box 728
Santa Fe. NM 87504

Trail of Tear

家族の集団は、彼らの持ち物の残りを集め、これから行く道に向かって整列した幌馬車にそれらを積み込んだ。深い森は、3ヶ月に及び彼らが捕らえられていた今にも壊れそうながたがたの板と樹皮で出来た小屋の火災になっているキャンプからの煙でかすんでいた。空はテネシーの南東部のまばゆい秋の青いものだったが、群集の中の監視者はみんなの顔が、後に残してきた全てのものと前途に横たわるもの全てについて、“危惧の念で思慮している”ことを示していると思った。

“移動するように”との呼びかけで、80歳の老酋長の **Going Snake** は彼の馬に乗り、そして数百名のチェロキーの行列を導き、まだ見ぬ新しい居住地となる土地への紆余曲折の旅の最初の第一歩を踏み出した。突如、と、後に監視者が書いていたが、自然が澄み切った空から話しかけてきている様に思われた。

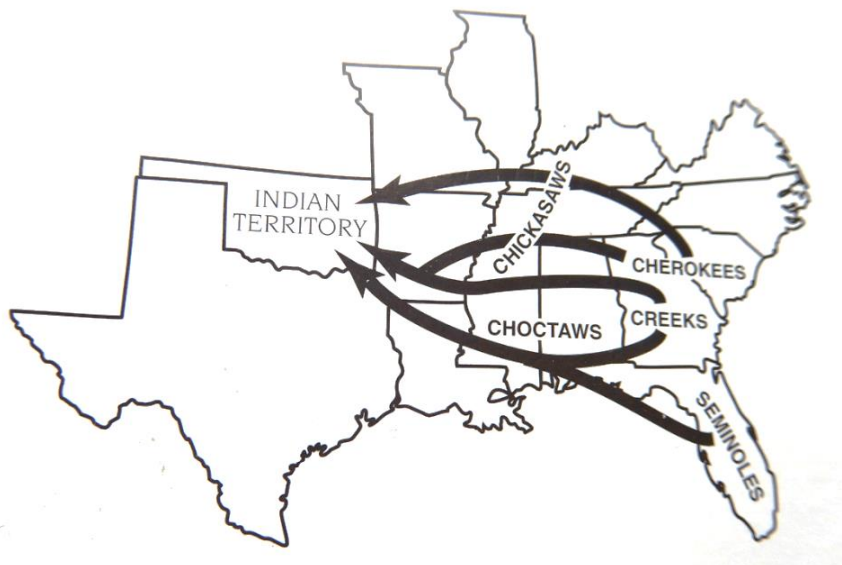
まさしく、この瞬間、遠くの雷の低い響きが私の耳に鳴り響いてきた。殆ど西の方角に、前途にささやきを送りながら、水平線の上に黒い渦巻いた雲が湧き上がった。このささやきが、あたかも私の人々と、彼らの父たちの土地で、愛し、大事に育ててきた全てのものから引き離された不幸な田舎者たちの不運にたいする神の憤りでもあるかのごとく、鳴り響いてきた。

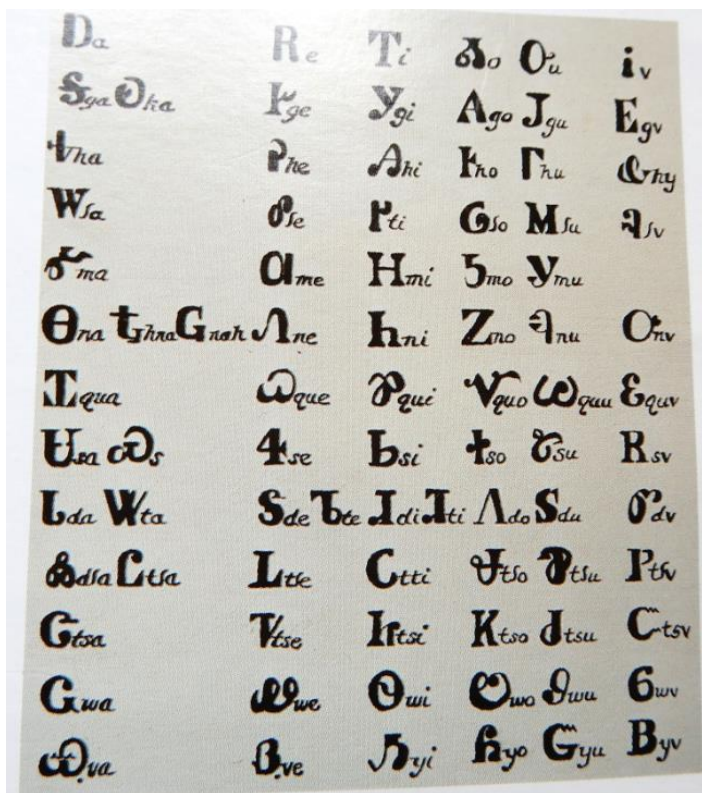
それは、アメリカの悲惨な出来事にぴったりの象徴であった。1830年代に、変更の恐怖に満ちた嵐によって根こそぎにされて、五つの巨大な部族を代表するアメリカインディアンの1000分の10もの人が、彼らの故郷であるジョージア、北カロライナ、テネシー、アラバマ、ミシシッピー、そして、フロリダから追われ、インディアンの居留地（今のオクラホマ）に移動させられた。多くの人は、800マイルもあるような、途轍も無い距離を歩いてであった。他のものは、幌馬車、蒸気船、そして、はしけを使って荷物を運んだ。ある者達は、行列を作って行進した。数千人もの人が、彼らの墓で、西への街道を示していた。彼らが進んだ幾つかルートー地図の上のよじれた筋一は、今日、涙の街道として知られている公の苦しい体験を記している。

多様性と変化に富んだ土地

1800年には、南東部には、8,000人以上のアメリカインディアンが生活していた。彼らの文化は、異なっていた。全ての者が狩猟、採集、交易、そして、農業をして定住地に住んでいた。彼らは、複雑に入り組んだ信仰と儀式を伴った宗教を信じていた。彼らの豊かな芸術的な生活は、部分的には、ヨーロッパ人との接触の前に隆盛を極めた重要な盛土文化から引き出されたものだった。彼らはゲームやスポーツを愉しんだ。とりわけ、幾分、政策的な言い争いの意味合いをもつスティックボールゲームには特に熱心だった。

この領域での五つの最も人口の多い部族は、チョクトー族、チカソー族、クリーク族、チェロキー族、そして、セミノール族であった。チョクトー族は、中央、ならびに、南ミシシッピー、そして、西アラバマに住んでいた。チカソー族は、北ミシシッピーとアラバマの一部、そして、テネシー、ケンタッキーに住んでいた。クリーク族は、アラバマ州の東部を拠点にしていた。チェロキー族の領地は四つの州に広くまたがっていた：ア





チェロキー族のアルファベット

や言葉から始まり、住宅や農業のやり方まで、こうしたヨーロッパの習慣が伝統的なやり方と交じりあって行った。多くの部族の指導者たちが、栽培農業をするようになり、そして、黒人の奴隷を使うようになった。ある素晴らしいチェロキー族の銀細工師、Sequoyah(George Guess)が、部族の音節表を開発した。これを使って、最初のアメリカインディアンの新聞、the Cherokee Phoenix、が 1828 年に発刊された。チェロキー族は文字で書かれた憲法を制定した。

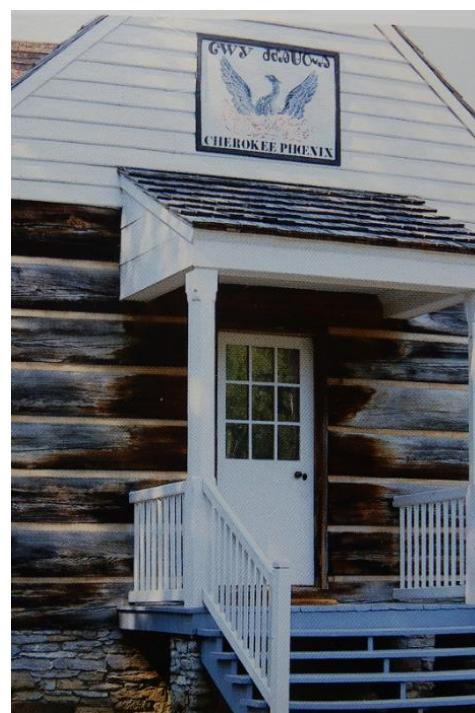
こうした変化が部族の中での古いものとの乖離をますます深いものにした。ある一部の者達が、白人との接触をすることに抵抗し、あらゆる調停に激しく反対した。こうした人達の集団は、その部族の純血の人達であることが多かった。混血の人達の集団、この人達は時が経つにつれ、次第に裕福になっていった人々だったが、彼らは、普通、白人との関係をより強くすることを望んでいた。部族の中での派閥の間での緊張が、時に暴力行為にまでなったが、部族の政策を捻じ曲げて行った。

最も激しい暴動は、1812 年の戦闘の間におきた、クリーク族のなかのものだった。Red Stick という部族の一部の群集が、白人たちとの調停に反対して武装蜂起をし、南アラバマの Mims 砦を襲撃し、400 人にもものぼる白人と混血のクリーク族のものを殺した。Andrew Jackson のもとで、クリーク族に加え、チョクトー族、そして、チェロキー族と戦っている白人たちが強硬な復讐軍事作戦をし、Horseshoe Bend の戦いで、Red Stick の群集を打ちのめした。この敗れた戦

ラバマ州の北東部、ジョージア州の北西部、北カロライナの南西部、そして、テネシー州の南東部であった。セミノール族は基本的にはフロリダの細長く伸びている地域に住んでいた。

ヨーロッパ系のアメリカ人との最初の接触は、スペインの征服者たちから始まったが、その後、ミシシッピの谷、そして、湾岸地域のフランスの軍隊駐屯地の人達となった。イギリスの交易者達が、1700 年代の初めまでに東部地方からインディアン達の領域にやって来た。アメリカ独立戦争までの最初の白人の入植者達が入って来たのは、テネシーの東部であった。

インディアン達がしきりにヨーロッパの製品を欲しがったものは—ポット、毛布、馬、金属製の器具、銃、そして、そのほかいろんな物があった—こうした物が、彼らの経済活動、ならびに、生活の方法を活気つけるようになった。白人の交易者、そして、辺境地の男たちが原住民の女と結婚すると、混血の人口の増加が、あらゆる部族の中で見られた。ドレス



チェロキー フェニックスの印刷店、New Echota, Georgia

いが、クリーク族、チェロキー族、チョクトー族、そして、チカソー族の中の最後の重要な軍事的抵抗を記すものとなった。

増大していく危機

1812 年の戦い以降。白人たちの拡大の圧力は、膨大に膨れ上がった。若い合衆国の入植者、そして、農場主たちは、アパラチア山脈の東に広がる肥沃な農地を、英国、ならびに、合衆国の北東地域の飽くなき市場となりつつある綿花のためという考えのもとで、しきりにこれを要求した。アラバマ州、ならびに、ミシシッピ州が 1817 年と 1819 年にそれぞれ州として認められた時まで、インディアン達の土地を白人に解放するよう、要請が聞かれた。

数年の間、Thomas Jefferson も含めた、多くの白人が、インディアンの人達を西部の地域に移住するように呼びかけた。彼らは、丘陵となったアーカンサスの西の森林地帯、ならびに、草原で、アメリカインディアン達は、隣り合わせの白人たちからの圧力もなく、自由な生活が出来るだろうと説得した。白人たちのながれに適合して行くものと思われる間は、合衆国の政府は、白人たちの農場主に、インディアン達の土地を渡すように部族に圧力をどんどんかけて行いった。1820 年台までに、2・3 千人のチョクトー族、そして、チェロキー族の者が、アーカンサス、テキサス、そして、やがて、インディアンの領地となるところに移住して行いった。しかしながら、スペイン領フロリダに住んでいたセミノールを除いて、全ての部族は、ミシシッピから東の彼らの故郷は保持できる事に思われる協定を持っていた。西の地域に移住する様に話されたときに、彼らは、こうした契約の部分を持っているんだと返答した。多くの者が、アメリカの思惑に対するこれまでの支援を指摘することが出来た。チョクトー族や多くのチェロキー族の物が、アメリカ独立戦争の時に、入植者たちに沢山の支援をしたのだった。チョクトー族は、ニューオーリンズの戦いでは、Jackson の側に立って勇敢に戦った。こうした部族は、白人の伝道施設を許したし、むしろ、歓迎さえした。彼らの殆どの者が、彼らの土地は彼らの人間としての意味合いでは、神聖なのだと主張した。その土地を離れるということは、彼ら自身を失うようなものだった。

にも拘わらず、その圧力はますます増大した。1820 年代の中までに、数千もの白人の入植者たちがインディアンの土地に侵略してきた。多くの苦情は、何の救済ももたらさなかった。事実、南部の州は、この土地の侵入を奨励し、そして、もっと沢山の土地が明け渡されるべきだと要請した。州の権利の発行を懸念した合衆国政府は、協約の中の責任を何ら持ち出そうとしなかった。インディアン達の中での抵抗が頑強になってきた。1819 年にチェロキー族の議会が、これ以上の領地の割譲は認められないと正式に公告をした。

1828 年の Andre Jackson の大統領選出が、こうした出来事を優先課題とした。彼が、この対決の場に立つことに何の疑いも無かった。彼は、インディアンの戦う人としての彼の評判のパーティを作り (American Indian 同盟の援助を得て)、そして、立ち退きの熱烈な支援者としてのキャンペーンを行なった。1830 年に議会が、彼に、彼が望んでいたもの—立ち退き条例を与えた。その条例は、彼に対し、インディアンの領域の他の土地と交換する東部の地域への侵略者たちと合意するという事を正式に認めるものであった。政府は、後に残した資産に対して支払いをし、西部への移動を支援し、部族が入植することを助け、そして、彼らの新しい土地での彼らの保護をするというものであった。全てのこうした保証に対し、そこに暗示されているものは明らかだった：全てのインディアンは移住するだろう—さもなくば……。

最初の退去：チョクトー族とチカソー族

皮肉にも、最初の退去の努力が、それまでアメリカ合衆国と一番良く協約を結んできた部族—チョクトー族に対してなされた。彼らの指導者たちは他の殆どの部族よりもより、より腹立たしく分割された。Jackson の代理人は、彼らに素晴らしいミシシッピの土地を大幅に認容することを提案し、そして、Dancing Rabbit Creek の協約を保証していた協力的な代弁者を孤立させてしまった。チョクトー族は、ミシシッピの東部の土地に関する部族の権利を放棄したが、しかしながら、望むのであれば、後の土地に残ること、そして、州の法律の下で暮らすことが誰でも出来た。移住

をする人は全ての人があとに残る資産の代価を受けとることになったのだろう。政府は、退去の費用の支払い、そして、彼らの新しい土地での最初の年の食料と住居を提供するつもりであった。

合理的な取り決めのようには見えなかった。直ぐに混沌としたものに変質した。協約の言葉とともに、白人たちがチョクトー族の土地に押し寄せて来た。白人の法律にはなじみの無い部族の人達は、資産と持ち物を騙し取られてしまった。他の土地は奪われ、そして、農場は略奪されてしまった。殆どのチョクトー族の人達は、彼らの見たことも無い土地へむかい、自分たちの土地を離れることに対する利益を何ら得ることが出来なかった。何の保護も無いままに、ますます増え続ける悪夢の中で、多くのことがしぶしぶという思いで増していくばかりであった。

最初の移住が 1831 年に始まった。伝道使節団が幾つかのパーティに同行し、そして、他の部族の様に、チョクトー族は、彼らに認められた数だけの黒人の奴隷をつれて行

った。移住の経路の一つは、ミシシッピーの北部からテネシー州をとおりメンフィスに向い、そして、Little Rock を通ってアーカンサスを横切り、そして、インディアンの居留地の南部に到達するというルートであった。二つ目のルートは、ミシシッピー州の中央をぬけ、アーカンサスの南部をとおり、最初の街道に合流するというものであった。

まことに惨めな、不十分な資金援助と、貧相な管理のもとで、旅は苦悶続きの大災難であった。厳しい冬により、旅行者たちは、0℃下までになる気温からの困難に曝す、アーカンサスを通る、沼地化し、凍った街道を余儀なくされた。こうした寒さを避けるために翌年の移住は夏に計画されたが、しかし、これらの流浪の民は熱射にさらされ、そして、熱を避ける術が殆ど無い状態に置かれた。非情にも一致したのだが、アジアのコレラの最初の大流行が、丁度、チョクトー族がみミシ



ミシシッピー河に沿った退去の苦痛に加わった冬

シッピーの谷を横切っている時に、この地域を襲った。この二年の苦難の目撃は、まさしくゾッと
するものだった。有名なアメリカ訪問者であるフランス人の Alexis de Toqueville は 1831 年の後
半にチョクトー族のところにやって来た。

その時は、冬の真っ只中で、
寒さはいつもよりも厳しかった：
降った雪は台地の上で硬くこおり、
川には、大量の氷が漂っていた・・・・
私は、〔チョクトー族が〕ものすごい川に
船出して行くところを見た。そして、
その荘重な光景が私の記憶から決して
薄れることは無いだろう
その集団の人々の間に、何の泣く声も、
悲痛の叫びも聞こえはしなかった。
みんなが黙ったままだった。

チョクトー族の血族であるチカソー族は、いくらかはよいような条件の元で、彼らの苦難の道を
歩み始めた。その条項は決して名誉のあるようなものではなかったが、Pontotok 条約（1832）は、
ミシシッピー州の北部にある彼らの譲渡した土地に対して幾分よいような支払いを提案していた。
彼らは、彼ら自身の移住を計画することが許された。他の部族と同じように、彼らは、白人たち
により自分たちの土地が食い荒らされているのを見てきたが、しかし、彼らは、インディアン居留地
のなかで最もよいと思われるところを選ぶ機会を与えられたーそこは。テキサス州の州境に沿った
南の地域だった。

こうしたことらも拘らず、チカソー族に対する都合の良いことは変わって行った。1837 年に彼ら
が西部に旅をした時に、彼らはチョクトー族の北のルートを通った。豊富な資金が、彼らの旅の先
で用意されて支給をされるとの約束であったが、猛烈なインフレとなった価格を転嫁したその請負
人が、必要としたものとは途轍も無くかけ離れたものを要求してきた。夏の太陽の下に置かれた数
百バーレルの豚肉、そして、その他の食料は移住者たちがその場に着いた時には、何の足しにもな
らなかった。荒れた道と、そして、行く先々で商人たちに誤魔化されて、予定がずっと遅れ、彼ら
は、目的地からはずっと離れたところで冬になってしまった。“私は、ここでチカソー族とともに飢
えている。”と、政府の代理人が書いていた。旅の終わりごろ、旅行者たちは近くに居たチョクトー
族を襲っていた天然痘に見舞われた。そして、1838 年の衝撃的な干ばつが、旅を終えたおおよそ
6,000 人の人達をさらに苦境に曝した。

チョクトー族とチカソー族の退去は、典型的なものとなった。他の部族たちは、同じようなうま
い策略により彼らの土地からの締め出しを迫られた。全てが、西部への長い道のりを含んでいたの
だろう。細かなところは変っていたが、結局、最後には、それらの全てチョクトー族の指導者、
Harkins、彼は移住のための彼のボートの行程を監視していた白人のミシシッピー人に対して、彼
らの故郷の乗船の河岸から船出をすることについて述べていたが、彼が書いたような矛盾に直面し
た。“多くのものが、我々は自分たち自身の選択から離れて進んでいるのだ、と言っている。”と
Harkins は言った。しかし、そうではなかった。

彼が、どこでも、火に、また、
水に囲まれるまで、我々は、
間違った道案内についていく無学文盲の
よそ者のような自分たちに気づいた。
反対側のずっと遠くの川岸が希望を
抱かせてくれている；残ることは、
避ける事の出来ない絶滅なのだろう。
誰が躊躇するのだろうか、誰が、

自分が水中に飛び込むことは自分の意思に従った行動だというのだろうか？

強制的な退去： クリーク族

1812 年の戦闘のあと、他のどんな南部の海岸辺りよりも沢山の白人がアラバマ州に押し寄せてきた。クリーク族の領地、ここは、州政府により邪魔をされない土地であったが、ここに数千もの人が侵入してきたとき、合衆国政府の応答は、これは一度だけであるが、移住は唯一の現実的な解決策であるという説得であった。これにクリーク族の指導者達は直ちに拒絶した。

1832 年に、クリーク族の交渉者たちは、寛容な譲歩とも受け取れるようなものを認めた。Washington の協定は、アラバマ州東部の 500 万エーカーという広大な部族の領地を放棄したが、しかし、200 万エーカーの土地は、留まることを希望する人達のために分配される土地用に外された。誰一人、離れるように求められはしなかった。多くの家族は、その土地の所有者としての完璧な資格を持って、好きなだけ居残ることが出来た。もし、彼らが移住を望むのであれば、彼らはそれを売却し、合衆国政府の支援のもとに西部に移動することが出来た。多分、最も重要なことは、協約がその地の強奪を防ぎ、あらゆる市民権を保護することを約束していたのだ。

しかしながら、直ぐにこの協約は反故されてしまった。クリーク族の領地が査察され始めると直ぐに、投機家やペテン師達が、インディアン達から、彼らの土地の所有権を巻き上げる方法を見つけようという思惑に走った。彼らは、誘惑に負けやすい人達を脅し、そして、無学な人が、彼らの販売の請求書に、“X” が得られるように記載した。彼らは、ことが上手く運ぶように酒を使い、ギャンブルで不正を働き、法外な値段で高く売った品物にクレジットを使えないようにしたり、あるいは、もっと単純に、協力的な役人に対し、捏造した記録を提出するなど、このような悪さをした。クリーク族の立場は、いかさまが始まる前には危険な状態ではあったが、これが急速に悪化した。殆どのものが、絶望状態になって行った。軍の事務員が、取引商たちは“イナゴのように・・・、インディアン達を、もののように食いつぶし、彼らの家庭を酒浸しにしている。”と報告した板。クリーク族は、“威圧され、そして、脅かされ、彼は合衆国には適切な保護は何もなく、そして、自分たち自身も何らこれを防ぐ能力もない、という感覚でいる”状態だった。

ペテンと強奪が、1836 年、殆どのクリーク族の土地が白人の手に移るときまで続いた。残ったのは、一大体 15,000 人が、州政府がそこはもはや白人の新しい入植者のものだと言っていた土地に細々と暮らしていた。この時点で、極僅かの貧しいクリーク族の小さな集団が近くの入植者や旅人たちを襲撃し始めた。襲撃は直ぐに収まり、州の主要な新聞でさえも、土地の略奪者たちによる、インディアンをまさしく彼らの権利を保持することから引き離すための“むちゃくちゃな陰謀”



に迎合するような激しい抗議を喚起した。Lewis Cass、彼は、戦争の長官であり、退去の声高の擁護者であったが、直ぐに軍に対し、抵抗を粉碎し、そして、全てのクリーク族をまとめて、西部に連れて行くように、介入を要請した。

軍隊は、事実上、“クリーク族との戦争”で、これに参加した者、あるいは、同情した者、16 百名を取り押さえるのに、何の抵抗にもあわなかった。男達は、足かせを付けられ、手錠を嵌められ、そして、アラバマ州の Mobile から、

ミシシッピー州、そして、アーカンサス州の上流にスチームボートでつれていかれた。夏の最中までに、直ぐ後に女たちと子供たちが続いた囚人たち集団は、ほぼアーカンサス川に沿ったルートをインディアンの領地に向かって行進をさせられた。不適切な供給、悲惨な食料、がたがたの装備、そして、強烈な暑さが、誰が見ても衝撃を与えるような状況に追い込んだ。ある者が、“これほどまで、悲惨で、貧弱なインディアンを私はこれまで見たことが無い、……彼らは、実に何も持っていないのだ。”と言っていた。

クリーク族の大きな集団の大半は、極僅かの謀反の中では何の役割もせず、そして、事実、極僅かの何百人かの有志者がこれを支えただけだった。にもかかわらず、兵士達は、殆ど全てと言うくらい、部族のものみんなを拘束し、これを 2,000、あるいは、3,000 人のグループになるように命令した。真夏に始まり、そして、冬の真っ只中まで続いたが、彼らは、軍に指示されて西部につれていかれた。彼らは、膨大な数の奴隷たちと一緒に、アラバマ州の東部からミシシッピー州の北部やテネシー州のずっと南西部をとおる幾つかのルートを進んで行った。ミシシッピー州のかなり越えたところで、彼らは、それ以前の囚人たちが連れて行かれた同じ道を通してアーカンサスを横切って移動して行った。支給物や支援物資は、まことにゾットするほど貧弱で、アーカンサスを通る道筋は、起こったその地方の住民の仕返しを持ち込んできた、飢えた移住民による略奪や強奪品の、逃すその抜け道と化した。病氣と消耗が、様々な人達が絶え間の無い支援の流れを作るのに血を流すまで、後に残された。冬に、状況はますますやけになった。

数千もの人が....、全く靴や彼らの足を保護するものも履かずに；多くの者は、殆ど裸足で、そして、ごくごく薄い某のものも持たずに.....このような悲惨な状況のもとで、彼ら刃、冷たくなったぬかるみに入って歩き、そして、凍った大地を早く歩く様にせかされている.....彼らの多くが....亡くなり、そして。道路の脇に捨てられで、簡単にかすりを駆けられるだけで一狼たちにむさぼられるまで、そこに残っているのだ。

最後の集団が春の始めに目的地に到着した。

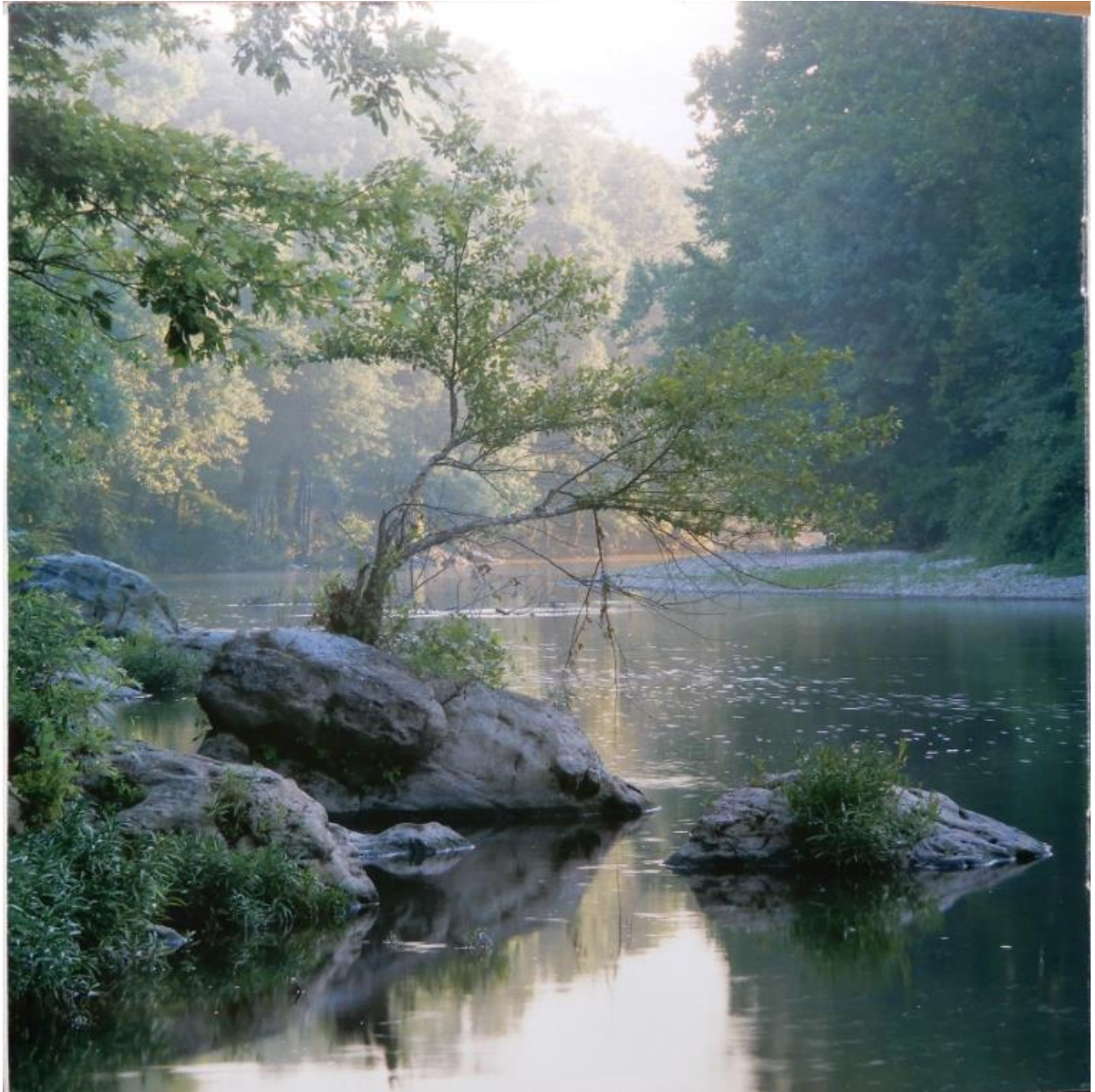
クリーク族は 退去の協約にサインをしなかった唯一の大きな南東地域に生活していた部族であった。にも拘らず、彼らは、軍の力によって退去させられた。推定された人口の喪失は、全ての移住をした部族の中では最も多かった。人口の 4 分の 1 の人が、クリーク族の試練の涙の行進の終わる前までに、亡くなった。

苦しい体験：チェロキー族

最東端の部族として、チェロキー族は数年の間彼らの土地を新しく入ってきたものに開放するようにとの圧力を感じてきた。ジャクソン大統領の選出とともに、部族の指導者たちは、そうした要求がますます強くなることを知っていた。そして、1829 年に、ジョージアの Dahlenegaa の谷の近くで金が発見されたというニュースがやって来た。数百人という金の探そうという人が、保護を約束された土地を我がものにしようと、そして、最も豊かな金の掘り当てになる筈のミシシッピーの東の地域に、今にも壊れそうながたがたのキャンプ建てようと、この地域にどっと押し寄せてきた。ジョージア州の役人が、直ぐに、この土地を原住民の人達の手から離そうと全力を尽くした。

彼らの政策は単純そのものであった。彼らは、チェロキー族が、自分たちが望む土地に住むことを不可能にしようと言うものだった。1829 年にジョージアの州議会が、チェロキー族の土地は押収され、そして、それを白人に受け渡すと宣言した。チェロキー族の誰一人として、金の探鉱を許されなかったのだろう。チェロキー族の部族の統治事務所は撤廃され、そして、その法律は法的な効力は無いものとなった。西部に移住するほかの人を落胆させるようなチェロキー族の者は誰でも、

刑務所に入れられた。チェロキー族の人達は、白人に対して裁判所に告訴することもできず、かつ、彼らは、自分たちの土地を譲渡するために集まる以外、宗教的な施しのようなものでさえ、ありと



オクラホマのイリノイ川に沿ったチェロキー族の今日の土地

あらゆる会合を持つことが禁止された。

部族の議会が、自分たちの議会の一致なしに、たった一エーカーでも処分した者は、いかなる者でも死ぬことになる」と明記した自分たち自身の法律で対応した。部族の持つ矛盾に直面し、長老の曾長の **Womankiller** が、他のものたちに話した。彼は、彼の部族のものは、“友好と言う金の鎖”により、白人たちに縛られている、と言っていた。もはや、多くの人が、国、そして、州の政府も、“圧制を働き”、そして、自分たちの土地に住んでいるチェロキー族を殺すように、させられていると言っていた。死でさえも、自分たちの故郷を放棄することよりもましだった。

今や、空にある私の太陽は
足早に沈もうとしており、
私の老いた骨は、まもなく、
大地の下に埋められることになるだろう、
そして、私は、父から、偉大なる創造主から、
引き継いできたこの地球の地の表面に
置かれることを望んでいる。
私が忘れられて眠るようなときには、
私は、自分の骨があなた方から、是非、
見捨てられない様にしてもらいたい。

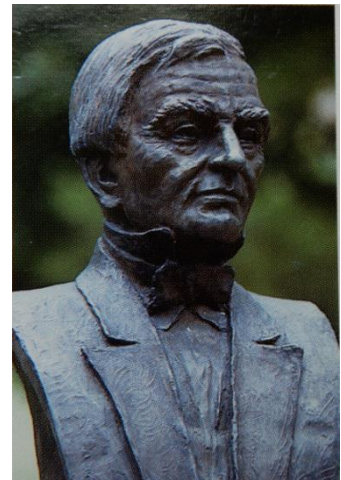
部族の議会は、政府の裁判所に対し、今は人々を恐怖に落としいれていると訴えた。チェロキー族は、州は、インディアンの人々の土地と、独立を保証する国の政府の施行を妨害する権利は何ら持っていないと説得した。チェロキー族は、ワシントン政府は、ジョージア州の襲撃から、自分たちを守るために立ち入らなければならないと言った。二つの決定的な決議、(Cherokee Nation v. Georgia, 1831 と、Worcester v. Georgia, 1832) で、アメリカ合衆国の最高裁判所は、チェロキー族に対するジョージア州の法律が、国家の基本法に“そぐわないもの”であるということに賛同した。

ジャクソン大統領は、ジョージア州の法律からチェロキー族を保護することを拒絶した。その代わり、彼は、部族の指導者たちの間での、厳しい分割の有利性を取り、リーダーとして Elias Boudinot、彼は、元 Cherokee Phoenix の編集者であったが、その彼などを含んだ“交渉団”との調停のための代理人を送った。交渉団は数年の間、退去に反対をしたが、もはや、彼らは、チェロキー族はなんら他の手立ても持っていないと言う議論をするに至った。

他の指導者や、チェロキー族の大部分の者は、尚、続けて移住には反対をした。チェロキー族は数世代ももの間、彼らの故郷として森に囲まれた丘陵地帯、緑の谷に住んでいたものとして知られてきた。主酋長の John Ross は、彼の一族の人々は、そこに留まり、そして、保護される権利を持っているのだと議論した。彼は、数千もの家族が、数百マイルも旅するということが、たいへんな試練になるものと知っていたのだ。

ジャクソン大統領の調停者は、退去の実行についての筋書きを作った。1835 年には、Red Clay でのチェロキー族の議会がそれを拒絶した。Ridge や Boudinot さえも、それに反対する大衆に加わった。すると、ジャクソン大統領は別の戦略を取った。それは、彼の代理人が、1835 年の 12 月に New Echota のチェロキー族の中心地にある別の交渉団と同意するということを報ずるものであった。そこに出て来ないチェロキー族の者は、そこでなされるどんな交渉にも賛成するものであると見なされるというものだった。僅か、300 人から 500 人程度の人がこれに参加した。同意の結論で、これは、100 人もいなかったが、—これは、大体 17,000 人ももの人口に対して—この交渉に投票した。

その項目のもとでは、チェロキー族はミシシッピ側の東の全ての土地を譲渡するというものだった。政府は、(決して実行しなかったが、) \$55 ミリオンを支払うことになっており、そして、アーカンサスとグランソール川に沿ったオセージ族の人々が住んでいる近くのインディアンの領地に新しく居住地を用意するというものだった。合衆国政府は、移住のための予算に同意した。移住者たちは、新しい住居を立てる最初の年の間の支援を約束された。(もっとも、この制約は殆ど無視されたのだが、) この全体の取り扱いは、協定の批准から二年以内に完結されなければならないと言うものであった。



John Ross

Ross と他の指導者たちは、目立った白人たちと同じように、不法行為の行動をとった。にも拘らず、熱烈な議論のあと、上院が 1836 年の単純投票で、協定を認証した。ジャクソン大統領は、もはやこれ以上の申し立ては聞かないと宣告した。彼は、チェロキーの統治機関はミシシッピの西に設置されるまで、存在はしていないのだと言った。1837 年の四月までに退去をしていない全ての部族の者は、土地の法律に違反していることになった。

Cherokee 族の退去

期限が近づいてくると、僅か約 200 名だけのチェロキー族の者が移住をした。残ったほかの者、約 16,000 の人と、1,600 人の奴隷、それに、何人かの自由の身となった黒人は、Ross が彼らの訴えを嘆願している間、自分達の土地に残った。彼は、協定を拒否するという 15,665 名の名前の入った嘆願書を持って、ワシントン D.C.に向かって旅をしたが、上院は、それを受け取らなかったのだろう。その一方、白人のジョージア人たちは、小屋や農園に目をつけ、チェロキー族の土地に、どんどん迫る圧力をかけて来た。John Woll 将軍、彼は、インディアンの暴動に対して防衛隊を送り出したのであるが、彼は、“総体的な状況では...胸を引き裂く様なもの” 以外に、“彼らの祈りに突然飛び掛り、そして、彼らの持っているものをことごとく奪い取らんばかりのまるでハゲワシのような” 白人たちにより、恐怖に曝されているおとなしいチェロキー族の家族について何も見出さなかった。1838 年の春、やや遅くなり、長官の Winfield Scott 将軍が、5 つの連隊とともに到着した。4,000 人の軍隊と志願兵に助けられて、彼は、全てのチェロキー族の者を捕らえ、そして、彼らがインディアンの居留地に連行されることができるようになるまで閉じ込めておくことになっていた。この取りまとめの作戦が、1838 年の 5 月 26 日に始まった。分隊が、居住地の丘を総ざらいに捜索した。家族は、彼らが持てるだけのものしか、一衣類、価値のあるもの、極僅かの形見のようなものしか持って行かなかった。他のもの—労働の世代の成果など、全てのものは残された。

Scott は、手厳しく“出来る限りの親切”が、移住されるものに払われなくてはいけないと指令した。兵士達は、これに一般的に従ったが、しかし、その他の者は、彼らは、その時が来るのを何年も待っていたような地方の者達の集団であり、たちまちのうちに分捕りする者達に変貌した。チェロキー族の記憶は、ぞっとするようなものだった。

夕食を取っていた家族は、ドアの入り口の方に突然の銃剣の閃光がはしり、びくっとさせられた。そして、

囲いの柵のほうに続くいらだたしい何マイルもの道を、

攻撃とのろいの言葉とともにつれて行かれるために立ち上がらされた。

男達は、自分達のいる場所で捕まえられ、そして、その道を連れていかれ、

女たちは、〔紡ぎ器の〕歯車から離れさせられ、

子供たちは、遊びを止めさせられた。

だれにとっても、峰を超えていくときに振り返り、

略奪や分捕りをするために兵士達の後に続いてやって来た

無法者の暴徒たちにより火をつけられて、燃え盛る自分の家を見た。

何年か後に、ある志願兵の者が振り返り：“私は、南北戦争で戦ってきて、数千人もの人により人々が平和のために銃で撃たれ、そして、虐殺されたのを見たが、しかし、チェロキー族の退去は私が見た中ではもっとも残酷なものだった”と、言っていた。数百人もの奴隷を含む、立ち退きされられる人達は、まず、チェロキーの町の直ぐ近くの 31 のキャンプに連れて行かれた。後に彼らは、アラバマ州に一つ、そして、残りはテネシー州にある 11 個の抑留所に移され、そして、連行されるのを待たされた。不潔な状況に詰め込まれ、そして、交互にやって来る暑さと雨により伝染病がはやり、チェロキー族の人達はゼーゼーという咳、囊虫、肋膜炎、そして、疫病に苦しんだ。赤痢が流行した。6 月の終わりには、子供と老人が特に危険であったが、死体が山と積まれた。多くの軍の役人が苦痛を下げようと努力した一何の効果もなかった。夏の間中、死者の数が増えた。生き残った人々は、弱り果て、士気をくじかれていた。

移住は、殆ど 1 年近くにわたっての苦難だった。1838 年の 6 月初めに、最初の家族が旅を始めた。

最後にインディアン領地へ苦闘の末入ったのは 1839 年の 3 月の中だった。

数千人もの流浪者の人達が様々な手段で幾つかのルートを使って移動していた。ある者達は、他の人達より、やや上手くいった。全ては、彼らのしてきた人々の最大の試練の道を後戻りしている様に思われたであろう。

大体 2,800 人もの人にとって、西部へのたびは、水路によってであった。Ross の上陸地点（現在の Chattanooga）で、彼らは、平底の船に乗船し、テネシー川の湾曲したコースに沿ってアラバマ州の北、テネシー州、そして、ケンタッキー州に行き、オハイオ川に到達した。そして、オハイオ川とミシシッピ川では蒸気船に乗り、ここを下り、それから、アーカンサス川をインディアン

居留地の東部の丘陵地帯に向かって上って行った。彼らの、回りまわった経路は、1,200 マイル以上に達していた。その世紀の最も熱く、そして、乾燥した時の一時期で、



アーカンサス川は干上がり、数百名の人々は、最後の行程を徒歩と馬車で行かなければならなかった。岩だらけで、整備のされていない自然のままの道で、強烈な暑さと窒息しそうな誇りで、病気と、年寄りたちは恐怖に苦しめられた。毎日のように、新しい墓が掘られた。70 人もの人が、旅の終点近くの Lee's Creek あたりで、飢えて行進していた者が、未熟なトウモロコシと桃をたらふく食べて、赤痢にかかり亡くなった。

かつて、Ross は彼の取りうる唯一の選択は軍隊に守られた移住であると理解して、彼は政府と移住の残りを監視する様に契約をしていた。残っていた、拿捕されたチェロキー族の者は 13 の集団に組織された。留まっていたキャンプで、彼らの生活品、そして、所有物などは、白人たちにより、借金の支払いとして、あるいは、殆どは、いんちきに、取り上げられてしまった。持ち物は、“昼日中に我々から盗まれた。”と指導者の Ross が書いていた。“われわれは何の防御の手立ても無い状態にあると知っている” 泥棒たちによってだ。最初のグループの出発は、10 月の始めで、最後は、12 月の初めであった。

陸地を通る退去のコースには三つのおもなルートがあった。馬車で、一番古いもの、新しいもの、そして、むしゃくしゃする道は、支給された物と所有物でゴった返していた。キャンプでの野監禁は、ひどい弱体化と病気をもたらした。ある旅行者は、この人達は特別の協約をしていた人々だが、彼らは、他の人達よりも沢山の支援物資を手にすることができたが、一般的な政府の、一人 1 日当たりの 16 セントという配分は、毎日の生活で基本的に必要な額のからは程遠いものになっていた。Ross は、出発を延期するなどして、夏のおぞましい暑さと熱気を避けていたが、無慈悲にも運悪く、1838 - 1839 年の冬は、猛烈な雨に見舞われ、出発した移住者たちは深い泥を苦労して進まなければならなかった。

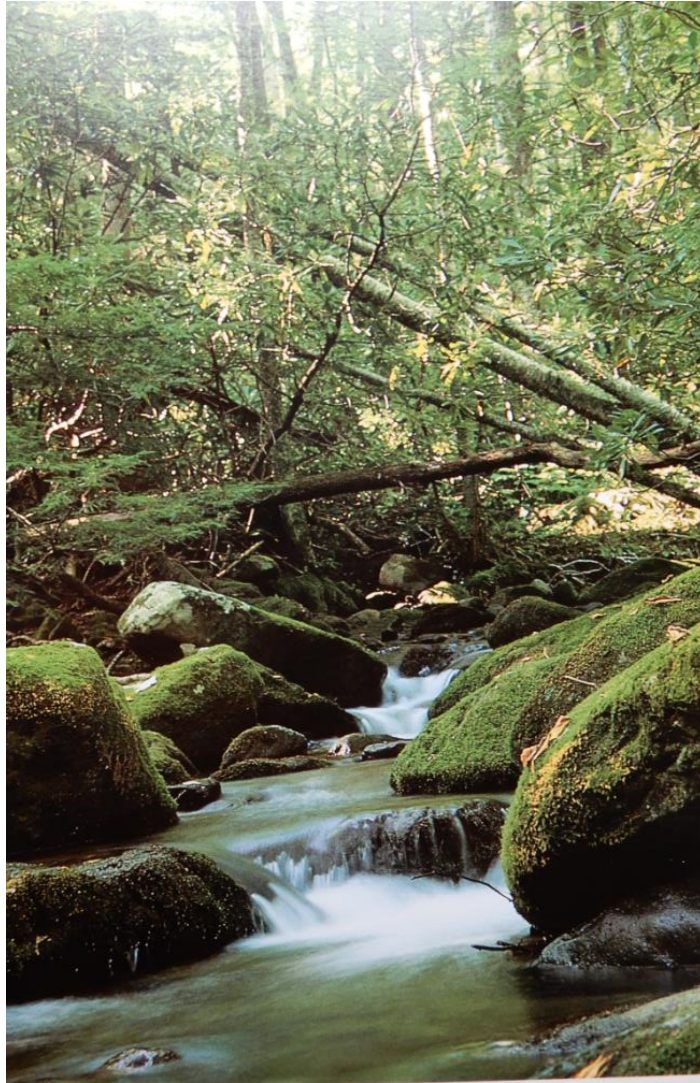
その後、天候は、強烈な寒さに変った。ほんの僅かの裕福な者達だけが、運搬車で旅をしていた。しかし、ある目撃者が書いていた。

実に沢山の人が徒歩で歩いている一年取った婦人、

明らかに今にも墓の中に眠りそうな、
そんな人が、背中に重い荷物を背負い、
旅をしていた一時には、凍りついた道を……
自然が彼らに与えたもの以外のものは何も足に履くこともなく……
ある者は、うなだれて下を向き……他のものは、
まるで、自然の鎖を粉々に今にも壊しそうな、
そして、獲物を狙うトラのように襲い掛かる、
野生的な血迷った様相をしていた。

多分、最も陰悪な時は、ミシシッピーでの、**Green's Ferry**、ここでは大量の群集が、時には数週間も、ミズーリ州に行くための凍って閉ざされた川を渡るために待っていたのであるが、ここでの

ことだった。専門家の **James Mooney** がずっと後になり、生存者と語っていた。



半世紀のちょっとして期間は、
凍った川の川岸で見られた、
幌馬車の中の閉じ込められた、
あるいは、一月の突風に曝されるのを
防ぐようにただ毛布だけで覆われた
大地に放置された何百という
病人と死者の哀れな状態の記憶を
拭い去るにはとても十分な
時間であったとは思われない。

トウモロコシの料理、マメ、そして、わず
かばかりの塩の付いた豚肉の食事で栄養失
調の旅人たちは、赤痢、ペラグラ、肺炎、
そして、その他の様々な病気に苦しんでいた。政府の医者は、千人の旅行者に一人の
割合だったが、彼らは最善の努力をしたが、
しかし、かろうじて僅かの施しができる程
度だった。大体どのキャンプでも、チェロ
キー族のものは、行進を続ける家族や友達
として、貧相な目印の付いた墓の中に葬ら
れて後に残された。生き残った人が、あと
で、こう思い出していた。

チェロキー族の後に残った領地、**Oconaluftee Creek**
Great Smokey Mountains Nation Park

新しい土地に向かって長い
 旅をする・・・女たちは泣き叫び、
 そして、悲しい嘆き声が響いた。
 子供たちも泣いており、
 多くの男達も泣いている。
 そして、みんなが、友達が
 亡くなった時の様に悲しんでいるが、
 しかし、彼らは、何も語らず、
 そして、うなだれて、ただただ、
 西に向かって歩き続けている。
 何日かが過ぎ、そして、
 非常に沢山の人が死ぬのだ。

1839 年の 3 月の終わりまでに、12,000 人のチェロキー族の最後の集団が、道草を食っていた。John Ross は、旅の殆どを船で旅行した。その旅の途中で彼は、彼の妻、Quatie を亡くした。ただ、彼女は、決して孤独という訳ではなかった。伝道使節の医者 of Elizno Butler は、4,000 人ーチェロキー族の人口の 5 分の 1、以上のチェロキー族が死んだと推定していた。

1835	Arishita
+	Improvements
	Fort Run Creek
Dwelling House 18ft sq. 12 ft. high, neat etc	\$200 00
Do. 18ft sq. split logs, 12 ft. high, c. roof & chimney	100 00
Stable 18ft sq. 12 ft. high, very neat	40 00
Set of Crib under our roof	25 00
18ft 18ft 14 ft. logs	20 00
23 Peach Trees of 12	34 50
3 Apple do c 12	9 00
Gard Lot 2 Acres	11 00
17 Acres imp. Land of 8	136 00
	\$374 50
1836	Peggy Moore
+	Improvements
	Fort Run Creek
Dwelling House 18ft sq. 12 ft. high, 12 ft. high, c. roof & chimney	\$150 00
Kitchen 18ft sq. " " " "	40 00
Crib 12ft sq. split logs	18 00
Stable 18ft 12 ft. high, 12 ft. high, 12 ft. high	20 00
Food House 18ft sq. 12 ft. high	20 00
30 Peach Trees of 12	45 00
40 Acres imp. Land of 8	520 00
27 " " on Clowah of 10	270 00
	\$880 00
Rest on 15 Do 24 ft of 32	1105

戦争と退去：セミノール族

すさまじい武力の抵抗がスミネール族からわきあがってきた。彼らは、南フロリダの他州に挟まれた狭い土地に住んでいる人達で、彼らは、白人たちからの干渉を余り受けることもなく、比較的に自由であったことを放棄するのを好まなかった。彼らは、奴隷たちや自由人となった黒人ー彼らの社会の一部でもあったが、その人達を放棄するようにとの政府の要請を断った。政府は、セミノール族に対して、もし、彼らが西部に移住したならクリーク族と一緒にするように求めている。セミノール族のかかりの人は、クリーク族の流れの人もいたけれども、セミノール族は、個別の、全く異なる人であるという認識をするように求めた。

白人との関係は、1821 年にスペインがフロリダを合衆国に移管して以来、議論の対象となっていた。セミノール族は、彼らの土地を白人の農民や農園主に解放するようにとの圧力を感じていた。緊張は、1835 年になり高まった。セミノール族が、彼らの政府の代理人を殺害し、そして、彼らの退去を強制するように派遣された軍の指令を無視した。彼らは、“セミノール族の最後の血の滴りが、獲物を撃つ地の埃にまみれるまで”、戦うだろう、と彼らの指導者の一人が書いて

いた。

こうして、アメリカ人の歴史の中で、最も長い戦争の一つが始まった。7 年間の間、軍の部隊とクリーク族、シャウニー族、デラウェア族、その他の部族からの呼びかけに応じたインディアン達が、フロリダの深い森の中を、湯気のようにもうもうとした沼地を、キャンプや食料の宝庫を破壊しながら、逃亡者たちを追い立てて、進んで行った。費やされた費用は膨大であった。軍隊は、マラリアやその他の病で、病人が続出し死亡するものが沢山でた。セミノール族は、はっきりとした意見に固執して反撃し、恐ろしいほどの損失を負わせた。彼らの最も優秀な指導者は、“最後の血の滴るまで” 戦うということを身をもって証明した戦士である、Oceola だった。彼と、その他の指導者たち—Wildcat, Billy Bowlegs, Crazy Alligator, Jumper, そして、Abraham, 彼は黒人であるが、部族の仕事の中で高い地位にのし上がった人物だったが、彼らが、軍の指揮官である Thomas S. Jesup 将軍をいらつかせ、そして、自尊心を傷つけるような抵抗を呼びかけた。軍の途方も無い力が、セミノール族に犠牲を強いた。家族は、飢餓状態に押し戻され、精根尽きさせる戦いは、彼らの覚悟するところまで、疲れさせていた。兵士達は逃亡者の小さなグループ、大体は 2 人とか 3 人であったが、彼らを捕え、他のものたちは降参した。幅広く非難された行動の中で、Jesup は休戦の旗の下で開かれた会議の間に捕えられた Oceola に指示をした。Oceola は、南カリフォルニアの Charleston に収監されていた、1839 年の初めに亡くなった。Wildcat と Billy Bowlegs に指揮されて、なお、ある者達は戦いを続け、そして、湿地帯の奥深くに引きこもり、拿捕から逃れた。およそ 1,500 人の白人兵士達が死んだ—これは、2 人の拿捕あるいは、追放されたセミノール人あたり一人の割合だった。

1842 年に政府は、更なる追撃は、犠牲を払う価値が無いと決断した。捕まえられていないセミノール人はエバングレードの地域に残ることを認められた。そして、彼らの子孫たちの一部の者達が現在もなおそこに住んでいる。拿捕されたセミノール族は彼ら独自の涙の道をとおり西部に連れて行かれた。1836 年に退去させられたグループの 407 人のうちの 25 人のものが、スチームボートが Smith 砦に到着する時までに亡くなった。それに続く 3 週間は、もっとずっとひどかった。雨で足止めを食い、そして、深い泥濘に足を取られ、彼らはテキサスの新しい居留地に向かつてはいずりながら進み、多くの日々で、水に漬かったキャンプ地の近くに 3 人とか 4 人の死者を葬った。二ヶ月の旅の間に 87 人のセミノール族の者が亡くなった—これは、5 人に一人の割合であった。1832 年から 1842 年の間に、拿捕された、あるいは、降伏した人達は、イリノイ川に沿ったインディアンの居留地に連れて行かれた。セミノール族とともに居た黒人たちは、白人、ないしは、クリーク族、彼らは、軍隊と一緒に戦った部族であるのが、そこの奴隷に戻された。追放されたセミノール族は、彼らの保有しているもの、土地や、独立性と言うものを 1843 年に、失った。その時は、彼らの最後の集団が彼らをどこか遠くに運んで行く船に乗った時であり、ソシテ、彼らの指導者の一人が、役人に対して次のような最後の要望をした時であった：

インディアン達は戦闘の雄たけびを
上げることを望んだ。私は、それを許し、
そして、それがなされたが、
しかし、直ぐ後に感覚の改革が
それら全体に押し被さるよう思われた；
波止場に近づきながら、インディアン達が、
それが、実に、今の我々の実力であるような悔悟で
打ちのめされたかのように見えた。

私達は、尚、ここにいる

ミシシッピー側の東のインディアン達のほとんど大部分の人達が西部への移住を被った。それらの夫々が、独自の土地の放棄と略奪の物語を持っていた。数十もの部族—遠くはニューヨークや、北の五大湖に掛かる地方からも—こうした人達がインディアンの居留地に押し込められた。しかし

ながら、退去は決して完結したわけではなかった。エバーグレードに残ったセミノール族に加えて、南東部には、やく 400 名のチェロキー族の者が、拿捕を逃れて北部カロライナの地域に残っていた。このチェロキー族の人達は—Oconaluftee Cherokee もしくは、チェロキー族の東の血族集団と呼ばれている—その源を彼らにアメリカ市民権を与え、そして、チェロキー族の統治に属していない土地の分配を認めた 1819 年の協約まで遡ることが出来る。1866 年に彼らは、市民権を公式に与えられた。現在でも、約 10,000 人の人達が、北カロライナの西部にある保護居留地で生活して居る。

クリーク族の Poarch Creek の血族集団が、アラバマ州の南部 Atmore に留まっていた。数千人ものチョクトー族は、ミシシッピの社会の重要な立場にある。多くのクリーク族、チョクトー族が、旅の間に集団から抜け出し、そして、ミズーリ州やアーカンサス州で、旅の道に沿って住み着いた。

旅の道を歩いた人々にとっては、とても乗り切れるような辛さではなかった。それ以後の何十年の間、政府はしきりに部族の文化を抹消しようと直接努力をして来た。宗教的な儀式や踊りは禁止された。とてつもない圧力が、彼らをキリスト教徒にするために払われた。執行者たちは、社会的、ならびに、個人的な習慣、衣装の様式、そして、男達の髪の毛の長ささえも厳しく規制した。人々は、家族や、個人の尊厳を損なうような、英語化した名前を付けされた。部族の統治は、徐々に衰え、そして、覆されていった。子供たちは、部族の言葉が禁止され、部族の慣習は抑制された学校に行くことが強要された。1880 年代から 1930 年代にかけて政府の分配プログラムが部族の持つ共同土地保有を、ある部分については部族のものに個人の所有をみとめ、あとの残りは、入植者に開放するというような形で、この権利の解消を行おうとした。こうした、アメリカインディアンの集会的なもの和个人的な生活を規制しようという努力は、国の歴史の中では、何ら、一致するものではなかった。

チョクトー族、チカソー族、クリーク族、チェロキー族、そして、セミノール族は、今日でも生き残り、隆盛を極めてきた。チェロキー族だけでも 180,000 人以上の人が登録されており、65,000 人の人達が、部族の支配権の下で、オクラホマの地に住んでいる。五つの全ての民族が彼ら独自の部族の政府を所有している。

“我々は、かろうじて何とかやって来たのではない。我々は、確固たる、確信的なやり方でしかとやって来たのだ”と、Wilma Mankiller が、チェロキー部族の主酋長としての就任式で話していた。全ての種族により達成されたものには、旅行センター、ゲームセンター、診療所、教育と経済の開発プログラム、奨学金制度、そして、病院が含まれている。

五つの全ての部族は、彼らの文化が、その過去においてそのようであったように、生き生きと、そして、躍動感を持つよう、これを確たるものにするために努力している。部族の言葉の授業が、オクラホマ大学のものも含め、学校で実施されている。博物館や文書館がこうした顕著な人々の歴史とか伝統ヲ保存し、展示している。こうした努力が立派な遺産を記念し、そして、涙の道の長い道のりを通した生き残りのための重責と恐怖に満ちた苦難のために払われた、そうした人々の犠牲を称えている。



チェロキーの木工技術者

南東部にいた部族の壊滅的な結果を秘めた、インディアンの移住条項が施行されてから 170 年以上が経っている。このアメリカの歴史の中における、悲劇的な出来事を記念するために、議会は、チェロキー族のとった最初の陸路と水路のルート **National Historic Trail** の **Trail of Tears** として認定した。歴史的な街道の場所と区分に対する感謝の表明と保存を喚起し、そして、チェロキー族を始めとし、その他のアメリカインディアンの強制的な退去の物語を語り継ぐための任務を、部族と一緒に、**National Park Service** 協力機構；合衆国、州、そして、各地の事務所；非政治的な組織、そして、私的な土地所有者などが、実行している。

更なる理解のために

Grant Foreman, *Indian Removal* :

The Emigration of the Five Civilized Tribes of Indians

John Ehle, *Trail of Tears: The Rise and Fall of the Cherokee Nation*.

Angie Debo, *And Still the Waters Run* ;

The Betrayal of the Five Civilized Tribes

Anthony F. C. Wallace, *The Long Bitter Trail*.

2018.12.08 訳完